

新たな方向性を探る

札幌学院大学人文学部教授 櫻 田 顕

平成 14 年度は、「新学習指導要領」が導入され、『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想』が発表され、「SELHi」などのプロジェクトが打ち出されました。又、翌年の平成 15 年度からは完全学校週 5 日制が実施されるなど、教育改革の大きなうねりの中にあって北海道の高校英語教育についても、新たな取り組みや組織活動の充実が求められる時期でもありました。

幸い、高英研が統轄する「高教研英語部会」「中高英研」「メディア研（旧 LL 研）」「高文連国際交流部門」の 4 部門は、それぞれに新学習指導要領を踏まえ新たな時代を見据えた英語教育のあり方について、先進的な取り組みを進めていました。

「高教研英語部会」では、当時、事務局校であった札幌厚別高校の稲毛先生を中心に全道各地から集まった運営委員の先生方が熱心に取り組んでおり、正月に行われた高教研研究集会で大きな成果を挙げておりました。お陰様で、全体的に参加者の減少傾向が続いていた高教研の中で英語部会が大きく参加者数を増やし、全教科の中で初めて参加者数が一番になった年でした。

又、札幌国際情報高校が平成 14～16 年度文科省の SELHi 指定校に選ばれ、新たな英語教育の指導法や評価法の研究開発に取り組んでいましたが、高教研研究集会でその取り組み状況を発表しました。この年の研究集会には、SELHi の指導・運営に関わっておられた上智大学の吉田研作教授に講演と模擬授業をお願いしました。こうしたことが現場の先生方にも刺激を与え、英語授業の改革・改善や北海道の英語教育全体の向上に少なからず寄与したのではないかと思います。

高英研の組織については、傘下にある 4 部門の当番事務局校グループが編成され新たなローテーションで走り出して間もない頃でしたが、当番校の決定と英語科校長の関わりや 4 部門の会員基盤の整合性の問題、文科省の英語教育改革を踏まえた組織全体の活動内容の充実など、長期的展望に立った取り組みを考える必要がありました。

そこで、臨時常任理事会を何度か開き、長期的な視野に立った組織の見直しについて話し合いを持ちました。当時は、石狩管内に英語科出身校長が 9 名おり、又、全道校長会の支部長・理事になっておられる校長も多く、比較的容易に集まることが出来ました。議論を重ねた後は、酒を酌み交わして楽しく語り合ったことを懐かしく思い出します。

その後、「高英研組織検討委員会」を立ち上げ、深澤校長(岩見沢緑陵高校)を中心とした若手英語科校長に後を託しました。この度、高英研が組織としての機能を大きく充実させ、英語研究会のネットワーク化や念願であった夏休み中の総会・研修会の開催が実現することになり、感慨無量のものがあります。

新たな第一歩を踏み出した高英研の今後益々の発展を祈念しています。

(平成 14 年度高英研会長、北海道札幌国際情報高等学校長)